

隣りの女

向田邦子



隣りの女

昭和五十六年十月三十日 第一刷

昭和五十七年四月十日 第六刷

定価 九五〇円

著者 向田邦子（むこうだ・くにこ）

発行者 半藤一利

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三の二十三

電話 東京（二六五）一二二一番

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

©Sei Mukoda 1981

Printed in Japan

目次

隣の女

5

幸福

69

胡桃くるみの部屋

121

下駄

169

春が来た

209

装釘 中川一政

短篇小説集

隣の女

隣
り
の
女

ミシンは正直である。

機械の癖に、ミシンを掛ける女よりも卒直に女の気持をしゃべってしまう。

いつものあの声が聞えてくる頃合だから、あんな声なんか聞きたくないから、いつもの倍も激しくガーと掛けなくてはいけないと思っているのに、ミシンはカタカタカタとお義理に音を立てている。

自分の気持を見すかされているようで、サチ子は噛みつくように激しく掛けた。こわれたところで、どうせ借りもののミシンである。下請けのブラウスは一枚上げれば千二百円になる。ちゃんと月給を運んでくる夫がいるのだし、まだ子供もないのだから、アクセクすることは無いのだが、遊んでいても勿体ない。貯金も増やしたい。そう思いながらもサチ子はうしろの壁が気になって仕方がない。

二DKのつましいアパートである。居間兼食堂の六畳の、ちょうどミシンを踏んでいるサチ子の背にあたる白い壁に、泰西名画がかかっている。勿論複製である。声はいつもそ

のうしろから聞えてくる。

いきなり激しい音がした。ガラスの器かなにかを壁に叩きつける音らしい。男と女の争う声がそれを追って聞えた。サチ子のミシンは、ひとりでにゆるやかになっている。

「ふぎけるなよ」

「シオドキってのはどういう意味だ」

「誰なんだよ」

「ぶっ殺してやる」

これは男の声である。

「乱暴するんなら出てってよ」

「そんな人、いないわよ」

「なにすんのよ。離して」

女の声も激してくる。

もみ合う気配がして、

「ガラス、あぶないでしょ」

女の声が甘える調子になってゆく。

サチ子はミシンを離れ、壁ぎわに近づいて耳をすませた。

「ねえ、ガラス、あぶない」

「大丈夫だよ」

「あぶないったら」

「峰子」

「ノブちゃん」

峰子というのは、隣の部屋に住むスナックのママの名前であり、ノブちゃんはの間から通ってくる現場監督風の若い男である。太いしわがれた声は三日にあげず聞いているのですぐ判る。

二人の荒い息づかいが喘ぎになり、やがて壁はかすかに揺れはじめた。サチ子は自分が隣の息づかいに合わせて呼吸をしているので少しおかしくなった。からだがほてっているような気がするが、これは隣のせいではない。ぼつぼつ夏物に切りかわる陽気のせいだと思いたい。

そこまではいいとして、おかしな格好にからだをねじ曲げ、壁にはりついて隣りの気配に耳をすませている自分の姿がミシンの横の姿見に写っているのにはびっくりした。

はね起きて、壁の絵を直した。別に曲っていないかも知れない。だが、直すのが癖になっていた。

買物籠を抱えてドアの外に出ると、足許にポリ袋に包んだゴミがあった。隣りのママが自分のドアの前に置いたのが風で転がって来たらしい。サチ子は指先でつまんで隣りのドアの前にほうり出した。同じゴミでも、隣りのうちのは殊更に汚ないような気がする。

大した緑もないのに、通りは青葉の匂いがした。ムツとした青くさい匂いよりも、こういうときは花の匂いが嗅ぎたいとサチ子は思った。たしか去年は、アパートを出たあたりに木犀もぎせの匂いがあったような気がするが、このあたりも一年一年、庭つきの住まいや空地が消えて、マッチ箱を積み上げたようなアパートに変わってゆく。

サチ子のアパートは西武池袋線大泉学園駅から歩いて五分である。三多摩へ出る気なら団地だって何とかなったのだろうが、夫の集太郎が、通勤は一時間以内でないと「差しつ

かえる」と決るので、安くない家賃を払っている。差しつかえるというのは、出世なのか、夜のつき合いなのかその辺ははっきりしないのだが、いまのところは夫婦二人きりなので、赤字はサチ子の内職でなんとかやっている。

肉屋は横目でにらんで魚屋に入り、鯛のアラを一皿買った。二皿ならんだのを慎重に見くらべて包んでもらう。同じ年格好の主婦が連れている二歳半かそこらの男の子の頭をなでて、笑いかけた。あるとき生れていたら、このくらいになっていたんだなとつい考えてしまう。暮のボーナスが出るまでと共働きをしていたのだが、勤め先の冷房にやられたのか流産してしまったのだ。絶対に男の子だったような気がして、あの当座は男の赤んぼうを見るのが辛かった。

三十前に第一子を、と実家の両親にも言われ、からだをこわしたのを、おに勤めをやめて、いわば「子供待ち」の毎日である。

本屋もレコード屋も素通りで八百屋へ入る。本を買うこともレコードを聞くことも滅多にない。夫の集太郎も同じである。

春菊と生椎茸をつまみあげ、赤いガマ口から八つに折った千円札を出した。八百屋のし

みの浮いた鏡に、サチ子の表情のない顔がうつっていた。

化粧をしないせい、か二十八にしては生気がない。夫の給料をやり繰りして、食事の用意と掃除洗濯と内職で毎日が過ぎてゆくんだな、という実感があつた。ときどき大きな溜息をついていることがあつた。

幸福ともいえないが取り立てて不幸でもない。しかし、此の頃、聖徳太子の顔が妙にシヤクにさわって仕方がない。

特売のトイレット・ペーパーを山と買い込んでアパートの外階段を上ったら、隣りのドアがあいて、あの男が帰るところとぶつかってしまった。

峰子と甘い声を出し、ノブちゃんと呼ばれていたのが嘘みたいなムツとした顔をして、サチ子とすれ違った。

当の峰子は、ドアを半開きにして、男を見送っている。髪が汗に濡れてはりついている。化粧してないときは、コーヒー色のあさ黒い顔で半病人みだが、かまうと別人になる。年はサチ子より七つ八つ上らしいが、けだるいしぐさも目尻の皺しわまで色っぽくみえた。

挨拶をしないでうちに入り、内職のつづきをはじめた。

誰かになにかしゃべりたいとき、ミシンが相手になる。ミシンに八つ当りしたり愚痴をこぼしたりするのだ。氣持が落着くと、うたた寝の枕代りになる。

サチ子は夢うつつのなかで、また隣の女の声を聞いた。

「谷川岳ってどこにあるんだっけ」

「群馬県の上越国境」

男の声が答えている。

「そうすると上野から上越線？」

「上野。尾久。赤羽。浦和。大宮。宮原。上尾。桶川。北本。鴻巣。吹上」

男の声は低いが響きのいい声である。ひとつひとつの駅名を、まるで詩でもよむように言っていく。夢ではない。声は明らかに、壁の向うから、隣の部屋から聞えてくる。

「行田。熊谷。籠原。深谷。岡部。本庄。神保原。神保原」

男の声がつつかえた。

いつもの、あの男ではない。ノブちゃんと呼ばれる現場監督風の、太い塩カラ声ではな

い。もっと深い声である。サチ子は声に誘い込まれるように立ち上った。

「神保原。新町。倉賀野。高崎。井野。新前橋。群馬総社。八木原。渋川。敷島。津久田。岩本。沼田。後閑。上牧。水上。湯檜曾。土合」

男の声は、言い終って大きく吐息をついた。

女の声が、くくと鳩のように含み笑いで寄り添っている。

「よく覚えているわねえ」

「谷川に登るときは、勿体なくて急行になんか乗れないなあ。上野から鈍行に乗って、少しづつ少しづつ、あの山に近づいてゆくんだ」

サチ子のからだも、だんだんと壁に近づいてゆく。

「だんだん近づいていると思うと、何べん登っても、はじめてみたいに胸がドキドキするんだ。土合の駅下りて山を見上げるときなんか、自分でも顔がほたってドキドキしてるのが判るんだ」

「男の子みたい」

峰子の声も弾んでいるのが判る。

「綺麗な山なの？」

「山はみんな綺麗だよ。どんな山だって、遠くから見るとみんな同じに見えるけど、丁寧に一步一步登ってゆくと、違うんだ、なだらかな裾野があって」

「くすぐったい……」

「思いがけないところに窪地くぼちがかくれてる」

「くすぐったいって言うてるでしょ」

「光のあたってるところ。かげになってるところ。乾いてるところ。湿ってるところ。みんな息をしているように見えるんだ」

サチ子の手が、壁に寄りかかって横ずわりになった自分のからだをそとまでゆく。スカートがめくれて、肢がのぞいている。窓からさし込む夕焼けが、からだに光と陰の地図をつくっていた。

男の声が、すこしくぐもって甘くなった。

「山は朝見ると、神々しく見える」

「昼間見ると？」